



春ニンジン

販売開発部営農振興課
営農指導員 松本 有希子



写真② TCH755
(2月中旬播種 5月末収穫)

本年度の試験結果

本年度の品種試験は、昨年度、露地

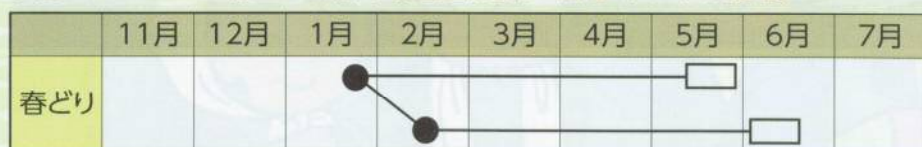
JA山武郡市管内では、春ニンジンの栽培品種として、彩誉系が主力です。彩誉は、春ニンジンらしく肉質が柔らかくて、低温肥大性に優れます。一方、収穫後半になるとしみ症が発生するなど、品質不良が散見されるため、晩生系でしみ症に強い品種が望まれています。

春ニンジンの品種試験

毎年、有望品種を選定すべく、山武農業事務所と連携して品種試験を行っています。品種試験の目的は、品質、外觀、形状、収量が優れているか、低温時期の栽培なので、太りが早く、尻詰まりがよいか、抽苔やしみ症の発生が少ないかなどを調査することです。

TCH712(タキイ種苗)は、しみ症に強いとされていますが、根長が長いことが課題です。TCH755の根長は、TCH712よりも短い傾向にあります。TCH71

表③ TCH755の作型 ★標準栽培適期表(一般地:トンネル栽培)



● 播種 — 生育期 □ 収穫期



写真③ ユニフォーム粒剤

8月の分析経過について

残留農薬分析点数…8月は実施なし

土壌診断点数 …… 合計35点

しみ症対策
しみ症の発生が懸念される圃場では、耕種的防除として、排水性の向上に努めましょう。薬剤では、播種前にユニフォーム粒剤(9×18キ/10ル)を全面処理で施用することをお勧めします(写真③)。ユニフォーム粒剤は、アミスターの成分とリドミルの成分の混合剤です。施用された方からは、しみ症の発生が軽減され、品質が向上したと好評です。しみ症の発生があった圃場では、次年度お試しください。

農業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary



半促成ナス

グリーンプラザ第一集出荷センター
営農指導員 川島 俊一



振り返り

本年度の半促成ナスは、キュウリと同様にうどんこ病(写真①)の発生が止まらず、管理に非常に苦労しました。また、梅雨明け以降、高温が続いたため、ヤケ果やボケ果の発生が多く、正品率が低下しました。

うどんこ病について

うどんこ病は生育初期〜中期に見られることが多く、発生初期の防除を失敗すると、後半まで影響が残ることがあります。定植後から定期的に予防剤を散布し、病気を出さないように管理することが重要です。発生した場合、ガッテン乳剤やフルピカフロアブルを使用し、しっかりと防除を行いましよう(表①、表②)。

近年、うどんこ病の新薬剤が発売されています。新成分の薬剤もありますが、既存の成分との混合剤も出てきています。詳しくは、各営農・経済センターまでお問い合わせ



写真① 葉に発生したナスのうどんこ病斑

表① ナスのうどんこ病に登録のある予防剤

薬剤名	有効成分	希釈倍数	使用時期	使用回数
ダコニール1000	TPN	1000倍	収穫前日まで	4回以内
アフエットフロアブル	ペンチオピラド	2000倍	収穫前日まで	3回以内
ベルコートフロアブル	イミノクタジンアルベシル酸塩	2000倍	収穫前日まで	3回以内
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	2000倍	収穫前日まで	4回以内

表② ナスのうどんこ病に登録のある治療剤

薬剤名	有効成分	希釈倍数	使用時期	使用回数
ガッテン乳剤	フルチアニル	5000倍	収穫前日まで	2回以内
プロパティフロアブル	ピリオフェノン	3000倍	収穫前日まで	3回以内
トリフミン水和剤	トリフルミゾール	3000~5000倍	収穫前日まで	5回以内
ポリオキシシンAL水溶剤	ポリオキシシン	5000倍	収穫前日まで	3回以内

合わせください。
アザミウマについて
天敵農薬を用いた防除が普及していますが、外部からの飛び込みにより、天敵だけでは防除が追いつかないケースも見られます。本年6月に発売され

たファインセーブフロアブル(1000~2000倍、収穫前日まで、3回以内)がハチや天敵に影響が少なく、アザミウマへの効果が高いという声が多くありましたので、ローテーションの中に入れていただくことをお勧めします。